



# 新年度に向けて

看護部長 辻村 淑子

昨年度は、電子カルテの入れ替えがあり、事務的な作業に追われ患者さんにご迷惑をお掛けしました。今年度は、職員も操作に慣れ順調なスタートをきりました。

さて、昨年度末から新型コロナウイルス感染で世界中が騒然としており、まだ終息していない状況です。グローバル社会となり、一国でウイルスや細菌感染が発症すると全世界に飛び火して感染経路を追及するとなると、地球規模になります。



医療現場では、

- ①標準予防策である手洗いの徹底
- ②感染経路別予防策である飛沫感染の咳エチケット
- ③接触感染予防策の環境清掃

等の遵守が必要不可欠です。感染管理対策では、地域の病院と2～3か月毎、連携カンファレンスを開き、お互いの病院訪問や環境ラウンドをして意見交換しながら改善に努めています。予定では来年、東京オリンピック開催があり、医療従事者中心に感染管理対策を徹底していかなければと襟元を正す思いです。



昨年は、バチカンの教皇フランシスコの訪日があり「すべてのいのちを守るため」というテーマのもと、弱い立場に置かれている人々をはじめとする人間一人ひとりの尊厳、さらにはこの地球環境を大切にすることがあるというメッセージが伝えられました。また、高校生のグレタさんの地球温暖化対策を後世に残さない努力をすべきとの発信を受け、考えさせられました。

病院では、少子超高齢化時代の到来により「診断して治す」から「生き方を支える」という医療のあり方が変わる中、地域包括ケアの役割が拡大しています。入院する患者さんの年齢も90才を超える方が多くなりました。健康年齢を保つことも必要ですが、骨折や持病の悪化等により入院を余儀なくされると治療後、自宅退院まで時間がかかります。老々介護や一人暮らしの方が武蔵野地域には多く急性期病棟では在宅復帰に苦慮しています。外来通院中に、生活背景に配慮したケアが必要となり、このような状況において、「生き方を支える」という難しさを実感しています。看護師が倫理的に状況を把握し、行動していくことが求められています。



看護の倫理は、決して特別なものではなく、日常の中に潜んでいます。例えば、「入浴したくない」と頑なに拒否する患者さんに対して「なぜ拒否するのだろうか」とその言葉の裏側には何があるのだろうか、患者さんのために一番良い解決策は何だろうかと思いを巡らすことも倫理的思考の一つです。忙しい日常業務の中で血圧を測り、服薬を確認するだけでは思考が停止します。常に患者さんや家族の思いをとらえることが大切です。看護や介護の専門性を発揮できるよう、看護の倫理の根本を見つめ、歩みを止めず、積極的に様々な取り組みを進めていきたいと思っています。

